

受賞の言

しみず ひろし

97 年中央大卒、07 年ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス・アンド・ポリティカルサイエンスより Ph. D. (経済史) 取得。11 年より一橋大大学院商学研究科・イノベーション研究センター准教授。73 年生まれ。



スピニアウトとイノベーション

一橋大学大学院商学研究科・イノベーション研究センター准教授 清水 洋

シリコンバレーから多くのイノベーションが見られるようになって以来、スタートアップに大きな注目が集められてきた。特に、優秀な人材が既存組織から独立し、新しいスタートアップを設立するというスピニアウトは、既存企業では追及が難しい事業機会を開拓するため、イノベーションの重要な源泉の 1 つとして考えられている。しかし、スピニアウトはイノベーションを本当に促進するのだろうか。本書では、スピニアウトが汎用性の高いイノベーションにどのような影響を与えるのかを、半導体レーザーをケースとして分析したものである。

蒸気機関に代表されるように、汎用性の高いイノベーションが社会や経済に与える影響は大きい。そのため、できるだけ幹の太いイノベーションを生み出し、そこから多くの果実を得ることが大切になる。しかし、幹を太く育てさえすれば、そこから自然に多くの果実が実るわけではない。新しい用途の開拓（多くの果実を実らせること）を促進する条件と、太い幹へと技術を育てることを進める条件の間にはトレードオフがあるというのが本書の最も大きな議論である。

より具体的には、次のようなトレードオフである。アメリカのように、流動的な資本市場や労働市場といったスピニアウトを促進するような制度が存在する社会システムのもとでは、サブマーケットを巡る競争によって、スピニアウトのタイミングが前倒しになるため、技術の軌道が早い段階で収束する可能性が大きい。技術の幹は太くなりにくいのが、多くの果実が開拓されるのである。一方で、日本のようなスピニアウトを促進する制度に乏しい社会システムでは、累積的な改善がされやすく、技術の軌道は大きく進化してする。しかし、幹の太い技術には育つが、サブマーケットの開拓が制限されるため、そこから多くの果実をとることが難しくなる。

本書のテーマは、これまでのイノベーションの研究において明らかにされてきた①イノベーションの発生には経験的な規則性が見られている点と、②イノベーションにはトレードオフがあるという点に基づいている。イノベーションは研究が盛んに進められている領域ではあるが、まだ分かっていないことも多い。今回の受賞を励みに、今後さらに研究を進めていきたい。